

## 第五章 クローケー

女王は立ち止まり、アリスを見ます。

「お前の名前は何という？ 子どもよ」と女王は尋ねます。

「私の名前はアリスです」とアリスは言います。

そしてアリスは思います、「怖がってはいけないわ、彼らはただのランプだもの」女王は庭師たちを見て「それに彼らは誰なのだ？」と尋ねます。

「私に聞かないで」とアリスは言います。

「私には分からないわ」

女王はアリスにひどく腹を立てて、「彼女の頭を切り落としてしまえ！」と言います。王は女王を見て、「でも彼女はまだほんの子供ではないか、なあ」と言います。

女王は今では庭師たちに腹を立てています。

「彼らの頭を切り落としておしまい！」と女王は兵隊たちに言います。

庭師たちはビクビクしています。

「アリス！ アリス！」と彼らは叫びます。

「どうか私たちを助けておくれよ！」

「こっちへ来て、早く！」とアリスは言います。

アリスが植木鉢の中に彼らを入れると、誰も彼らを見ることはできません。

「彼らの頭は取れているのだな？」と女王が尋ねます。

兵隊たちにはランプが見えません。

「彼らの頭はなくなっています」と兵隊たちは言います。

「よろしい」と女王は言います。

「それではクローケーをするぞ！ お前さんはクローケーができるのかい？」

「ええ！」とアリスは言います。

「では、いらっしゃい」と女王が言います。

アリスは女王、王、兵隊たちと一緒に立ち去ります。

「自分の位置に付くのだ」と女王は叫びます。

「さあ試合を始めるぞ！」

「何ておかしな試合なんでしょう」とアリスは思います。

「ボールはハリネズミだし、木づちはフラミンゴよ。きっと難くなるわ」

試合中、女王はたびたび腹を立てては、「彼の頭を切り落とせ！ 彼女の頭を切り落としてしまえ！」と怒鳴ります。

「まあ、何てこと」とアリスは思います、「私の頭はどうなっちゃうのかしら？」

すると突然、アリスはチェシャ猫を見ます。

アリスはチェシャ猫を見て喜びます。

「ごきげんいかがかな？」とチェシャ猫が尋ねます。

「私はこの試合が好きじゃないわ」とアリスは言います。

「どうやるのか誰も分かってないし、みんな怒っているのよ」

「君は女王のことが好きかい？」とチェシャ猫が尋ねます。

「いいえ、好きじゃないわ」とアリスは言います。

王がアリスとチェシャ猫を見ます。

「お前は誰と話しているのだ？」と王は尋ねます。

「私の友達のチェシャ猫です」とアリスが言います。

「私はそいつが気に入らないな」と王は言います、「だが私の手にキスをしてもよかろう」

「いいえ、結構です」とチェシャ猫は言います。  
王は腹を立てて、女王を呼びます。  
「女王よ、この猫を連れて行ってしまえ！」  
「当然ですわ」と女王は言います、「そいつの頭を切り落としてしまいなさい」  
皆がチェシャ猫を見ます。  
兵隊の一人が、「私はそいつの頭を切り落とすことができません、というのもそいつには体がないのです」と言います。  
「頭はあるではないか」と王が怒って言います。  
「頭を切り落とせ！」  
「それは公爵夫人のチェシャ猫よ」とアリスが言います。  
「彼女に聞いてみて！」  
「公爵夫人は牢屋の中だ。彼女をここへ連れて来い」と女王が兵隊に言います。  
すると突然、チェシャ猫は姿を消してしまいます。